中國人の死の觀念と佛教

道 端 良 秀

一

人間の生活においては誰でも、いつでも、どこでも皆一ように問題となることは、死ということである。永遠に再びもどることの出来ない、死の問題に對して、總ての人々が眞劍に取組んで來たが、あらゆる文化はこれが解決への努力だといつてもよいであらう。特に多くの宗教はこれの解決法であつたであらうし、不老長生を目的とする多くの醫藥や、幾多の民間信仰も、死を免れんとするものに外ならなかつた。

しかしいずれにしても、のがれることの出来ないこの死に對して、中國の人々は、どのようにこれを受け止めていたであらうか、中國佛教はこの問題をどう取扱つていたであらうか、中國人の精神生活史の重要な一面として、これを眺めて見たい。しかしこれには色々の問題が考えられるが、こゝでは特に死そのものに對して、どう考えていたか、これに對してどう處理しようとしたかについて眺めて見ることにする。

中國人の死の觀念と佛教（道 端）

二

論語の先進篇に、季路の鬼神や死についての問に對して孔子は、「未^レ能^レ事^レ人、焉能^レ事^レ鬼」、「未^レ知^レ生、焉知^レ死」といつている。孔子は死の問題については明確な解決を與えず、それよりも生の問題に重點を置いていた。しかし孔子は天命に従い、命を知ることが君子としてしているから、死ということに對しても、これを天命として受け止め、人力の如何ともすることの出来ないものと諦らめていたようである。論語の雍也篇に弟子伯牛の病床を見舞いその命終を知り、弟子の手を取つて「亡^レ之、命矣夫、斯人也而有^二斯疾^一也、斯人也而有^二斯疾^一也」といつている。こんな立派な人がこのような悪疾で死んで行くということは天命であつて、どうすることも出来ないのだが、それにしても殘念でしかたがないと歎いてゐる。又顔淵の死に對しても、「噫、天喪^レ予、天喪^レ予」と、顔淵の死を悲しみ、天を怨んでゐるようである。孔子に取つて

九

は人間の壽命は天命によることであり、天の定めることで、人力の如何ともすることの出来ぬ問題だったようである。伯牛のような人が悪疾で死し、顔淵のような人が若くして死ぬということは、天命であると知りながら、納得の行かない、天を怨みたい氣持をどうすることも出来なかつたのである。

このように人間の壽命や死に對して、當時の中國に在つては、天命說宿命說が一般の説として受け入れられていたようである。がこのような説に對して敢然とこれに反對の意見を述べたのが墨子であつた。「墨子」の非命篇上下はまさしくこの天命說宿命說に反對の説を述べたものである。

墨子の説によれば、天命論者の言は全く社會の秩序を亂し、人間の努力を無視したものであつて、危険な言論であり、暴人の道であるとこれを攻撃する。若しも有命論者の言を信ずれば、賞罰も賞罰とはならず天命となり、人民は慈孝弟長ならず、坐作進退に節度なく、男女の區別さえ立たないようになるであらう。いずれも天命と信ずるからである。従つて「上不_レ聽_レ治、下不_レ從_レ事、上不_レ聽_レ治、則刑政亂、下不_レ從_レ事、則財用不_レ足(乃至)執_二有命_一者、上不_レ利_二於天_一、中不_レ利_二於鬼_一、下不_レ利_二於人_一、而強執_レ此者、此特凶言之所_二自生_一、而暴人之道也……此天下之大害也」といつている。死生から起居動作まで悉くを天命とし、人間の自由意志を認めないような天命論者に對しての攻撃で、天

下の大害なりと言つている。勿論墨子の「天志篇」には萬物悉く天帝の支配下にあつて、貧富貴賤吉凶壽夭は皆天志に左右せられると説いて、この非命篇と矛盾のように考えられるが、彼の非難する所は人間生活に自由意志と努力精進を否定するものに對するものであつた。従つて儒家の天命說でも人事を盡して天命を俟つという、人力を認める天命說を相手にしたのではなかつた。

三

後漢の儒者王充の「論衡」は「論死篇」を初め「逢遇篇」「物勢篇」などに、人間の死についての論説や、人生についての宿命的な意見が述べられている。彼の意見は徹底した宿命論で、いかなることもめぐり合わせであり、運命であつて、人力ではどうすることも出来ぬとしている。生も死も、壽も夭も、富も貧も貴も賤も皆人力は不可能で、ただ命によるのみであると力説する。

この徹底した宿命說に對して、東晋に至つて道家の「抱朴子」は、人間の善惡の行爲によつて、どのようにでも天命が變更されると説く。人間の壽夭はその人の行爲の如何によつて決定されるという奪算思想は、道教の有名な倫理思想である。「抱朴子」内篇卷六微旨に「天地に司過の神あり、人の犯す所の輕重に隨つて以てその算を奪う。算減ずれば貧耗疾病

あつて、屢々憂患に逢う、算盡くれば死すという。」死といふことは天命運命で定つていても、司過神に算を奪われれば、算が盡きる時に死すといふ。算とは三日のことであるが（徵旨篇）、何故に算を奪われるかといふと、その人の犯すところの罪惡の輕重に従うもので、小罪は三日（算）、大罪は三百日（紀）が奪われるという。この罪の計算は人間の身中に住居している三尸神が毎月庚申の日に司過神に報告するその結果による譯である。これとは逆に天命によつて壽命が定つていても、よく功德を積み、善行を重ねることによつて、死ぬべき命を永らえることが出來た。延壽に對する色々な功德法が説かれ、はては不老長生の仙藥まで工夫されたのが神仙術であり、道教の服藥法であつた。

北齊の佛教信者たる顏之推の「顏氏家訓」の終制篇に死についての文章がある。死についてといつてもこゝで問題にしているようなものではなくて、直接には自分の死後の葬式のこと、喪祭のことなどを丁寧に表示している遺言状のようなものであるが、淡々として死を論じている點は、死を自覺し必ず死なねばならぬ人間を見つめて、そこに何の不安も恐怖も感ぜられない所にこの文章の特色があり、又流石に佛教信者だと思わせるものがある。死は人間に定められたもので、免がれることは出來ないといふ、死んでも復魄たまよばいをする必要がない、棺材も質素にすること、棺の内への納品も又明器など

一切省くこと、墳を作らぬこと喪祭も質素のこと、親戚友人も來るに及ばないことなど、こまごまと注意をし、祭りの供物のために殺生すれば却つて罪障を増す、若し親の恩に報いんとするなら、時々僧侶に供養し、七月十五日の盂蘭盆に施餓鬼をしてくれればよいともいつている。まことに佛教信者として、好ましい死の受け取り方を示している。

佛教は言うまでもなく三世因果應報を説く、人間の死生はこの法則によるもので、過去の善惡の業因が現在及び未來の果を招くもので、死も亦この業の法則の下に在る譯である。死を自己の業として受け止めて行く、しかし宿命論ではなく、いわゆる宿作外道を否定した佛教であるから、自由意志を否定する業論でないことは勿論であつた。このように顏之推は受け止めていたようである。しかし「歸心篇」の殺生についての項に、「殺生を好む人は死に臨んでその報いがあり、子孫が禍を受ける」といふのは、家族主義の儒教の思想を受けたものであり、當時一般に信ぜられていた思想で、佛教の自因自果の應報思想とは異なる譯である。このようなところが中國佛教の特色ともいふことが出來よう。

宋の佛教信者たる王日休居士は其の著「淨土文」の中で、宿業の問題に多くの事例を出しているが、こゝでも矢張祖先の業が子孫に及ぶといふ家族制の倫理を認めている。しかしここでは人の壽命が善惡の行動によつて長短となるという、

道教的な説を否定して、人間の禍福はただ現世の行業だけで決定されるのではなく、前世の業因が加わることを述べ、佛教の業思想を説いている。又同じく宋代に出来た善導作と稱する「臨終正念訣」に、人命の長短は生れる時に既に定まっているもので、これを延ばそうとして鬼神に禱つても無駄である。若し邪を信じて生き物を殺して鬼神を祭るようなことをすれば、却つて罪業を増して、壽命を損することになるであらうといつて、定つた壽命を鬼神の力で左右することは出来ないと言つている。

この「臨終正念訣」に、人間の壽命が生れた時に既に決定しているというのは、宿命的なのか、天命論的なのか、或は佛教の業思想によるものなのか、これだけでは充分にこれを判定することは出来ないが、鬼神に禱つて壽命の長短を左右し得るといふ道教的な、しかも一般に考えられていた民間信仰に對しての抗議であり、しかも殺生して犠牲を供えて祭るといふことは、反對に不幸を招く原因であると説くところは、まさしく佛教の思想である。

佛教の思想はいうまでもなく、三世因果輪廻轉生の業思想であるから、人生の禍福とか、壽命の長短といふことは、本人自身の業の如何によるものであつて、天命でもなく又どうすることも出来ない宿命や宿業ではない。釋尊が當時の宿命論者たも宿作外道を排斥して、正しい業思想を説いたこと

は、佛教が宿業を説いても、宿命論ではないのでつた。佛教が死に對する考えも當然にこの立場を取るものであつた。従つて若し孔子が佛教徒であつたなら、顔淵の死に對しても、何ら天を怨むことなく、自分自身の宿業としてこれを受け止めたであらう。死に行く顔淵も亦、死に臨んでは過去における自分の業として、これを受け取つて靜かに死を迎えたことであらう。

佛教の宿業はあくまでも三世に互るもので、儒教の如く現世だけで因果を説明するものでもなく、その業が儒教や道教の如く、自己以外の他者の絶對力によつて規定されるものでもなく、自己の業因によつて業果を得るものであつた。その業因は前世もあれば、更にそれ以前の過去もあり、更には現世の過去のものもあつた。従つてその果報の時期も順現業、順生業、順後業、順不定業の四種を數えているが、あくまでも自己の業因の報いである。「佛爲首迦長者説業報差別經」(大正藏第一)にも、「若し人重罪を作りて、深く自ら責め、懺悔して更に造らざれば能く根本業を抜く」とあるのは、宿命説を取らない一例であり、しかも善業が悪を轉ずることを示すものである。この點は、儒教や道教とも一脈相通する所もあるが、儒道は現世を中心として因果を論じ、自己よりも絶對の他者を中心とするに對して、佛教はあくまでも三世應報であり、絶對者の造物主を認めず、自業自得の理を説くも

のであった。中國佛教はこの線に沿って發展し盛んとなって行つたのであるが、知識階級たる士大夫ならこのけじめも多少理解されたであろうが、一般大衆といわれる庶民はどうであつたらうか。

四

中國の一般庶民に取つて、死が問題にされ、死後の生活に深い關心をもつようになって來るのは、何んといつても佛教の普及によるものであろう。現實的な享樂を中心とする民族が、死後の生活を考え、未來のことについて用意せねばならなかつたといふことは、彼等の精神生活の上での大きな變化であつた筈である。しかもこの死という問題に深い關心を持たざるを得なかつたのは、地獄經典の譯出とその流布とであつたであらう。

梁の寶唱の「經律異相」卷四九、卷五〇における地獄部下二編、唐の道世の「法苑珠林」卷七地獄部などには、あらゆる地獄の慘狀と罪人の苦相とが示されているが、一讀して覺えず膚に粟の生ずる程で、眞に迫り、身の痛みを感じる。しかもこの地獄はそれぞれ現世における惡業の多少によつて異なるもので、現世の修功德はこの惡趣を免がれることを詳細に説いている。

この地獄の描寫を感覺的に直接眼に訴へたのが地獄變相圖

であつた。そしてこの變相圖と共に民衆に最も歡迎されたのは變文と稱せられる佛教徒の民衆教化の俗文であつた。死の關心は、この死後の恐怖感から深刻な様相を呈して來る。佛教の民衆教化は、このような變相圖や變文、俗文、講經文を通して、次第に深く大衆にと浸透して行つた。従つてこの通れることの出來ない死に對しての覺悟と、死後の用意とはこれ又人々の最も重大な問題であつた。

六朝時代から盛んになつて來る死後の世界を取扱ふ小説、隨筆などの説話文學など、唐宋に多く出て來る冥界の狀況や、十王信仰、七々齋の行事など、いずれも死に關しての人々の記録であつた。これを見ると大衆は多く三世因果應報を信じながらも、天命を信じ、宿命と信ずる、儒教、佛教、道教の三教融合の思想におけるものであつたことは、中國佛教の特質といわなければならぬ。「宋高僧傳」卷三の唐の京師大安國寺子隣傳を見ると、子隣は母の死後の幽趣を泰山神たる天齊王に問ひ、王から簿吏の調査によつて母は獄に繋かれて苦を受けていることを聞かされ、これが救出に努力し、遂に母を助けて忉利天に生れさせたのである。こゝには出家した子隣が當時中國の民間信仰である死後の世界を支配する泰山神に母の救出方を願っていることを述べているが、このことは、死と泰山信仰が如何に強固な信仰として中國の人々に浸透していたかを物語ると共に、中國佛教がこのような形態

にならざるを得なかつたと共に一般大衆が、佛教をこのように信仰して行ったことが中國の佛教であつたことに注意すべきである。

また中國佛教が死後の輪廻輪生を説いたことは、現實的でも享樂主義である中國の人々に取つて、最も好ましい思想であつたようである。というのは、死後に再びこの楽しい人間社會に生れることができるからであつた。そのためにはどんな功德も惜まなかつた

このように中國佛教は、死の問題については地獄の恐怖と共に、一方人間への再生ということで中國人に與えた影響は頗る大きかつた。（昭和三九年度綜合研究）

1 渡邊照宏著「死後の世界」、宇野圓空著「宗教民族學」参照。

2・3 拙稿「中國佛教と精神生活」（結城教授思想史論集所收）

参照。

4 佛教の業思想の研究には多くの佛教學者の專著や論文があるが、今尙この問題が論ぜられ研究されるところに、佛教の宿業ということに問題があり、従つて色々と受け止め方に差異があるのである。

5 拙稿「中國佛教における地獄」（の恐怖印度學佛教學研究八ノニ）参照。

6 拙著「唐代佛教の研究」二章参照。

7 森三樹三郎著「梁の武帝」、同論文「六朝士大夫の精神」（大阪大學文學部紀要三卷參照）

大阪大學文學部紀要三卷參照

執筆者紹介（一）

松濤誠廉	道端良秀	藤田宏達	田島柏堂	橋本芳契	藤田清	藤田謙敬	山崎次彦	柏原祐泉	壁瀨灌雄	坪井芳朗	光川豐藝	紀野一義	篠原壽雄	白土わか	佐藤達玄	成田貞寬	光地英學	鐙本光信	梅庭昭寬	角田春雄	山口晴通	佐藤成順	
(九州大學教授)	(大谷大學講師)	(北海道大學助教)	(愛知學院大學助教)	(金澤大學助教)	(四天王寺女子短期大學教授)	(新潟大學助教)	(三重縣立大學助教)	(大谷大學助教)	(種智院大學助教)	(東洋大學助教)	(龍谷大學助手)	(寶仙短期大學教授)	(駒澤大學講師)	(大谷大學講師)	(駒澤大學講師)	(佛教大學教授)	(駒澤大學教授)	(福井工業大學講師)	(北海道大學大學院)	(總持寺副監院)	(曹洞宗宗學研究所研究員)	(大正大學助手)	